

氏名	GUROL ABDURRAHMAN
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4184号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	チュルク諸語における関係節構造(トルコ語とウイグル語を中心に)
学位論文審査委員	主査・教授 和田 道夫 教授 宮崎 和人 准教授 栗林 裕 准教授 片桐 真澄 准教授 金子 真

学位論文内容の要旨

本論文は、現代トルコ語(西グループ)と現代ウイグル語(東グループ)を中心に東西チュルク諸語グループの諸言語に見られる関係代名詞節構造について、現地言語調査データに基づいて形態論的及び統語論的観点からさまざまに比較検討・考察し、従来の研究とは異なる新しい統語分析法の可能性を具体的に提示し、その展開を試みたものである。

第一章で本研究の位置づけとその目標とするところについて述べた後、第二章ではこれまでの先行研究において未解決の問題とされてきた西グループに属する現代トルコ語関係代名詞節における連体接辞-en/-dikの分布を、統語分析上どのように正しく予測できるかについて詳細に検討し、統語的不完全性(Syntactic Defectiveness)という概念を用いてまったく新しい統語分析が可能であることを立証した。第三章では、東グループに属するウイグル語を中心にカザフ語及びキルギス語における関係節構造を形態論及び統語論の観点から検討し、その統語分布を記述した。第四章では、トルコ語とウイグル語における受動態の形態論及び統語論的特徴について現地言語調査による詳細なデータをもとにして検討し、その結果関係節構造内に生起する受動態構造において能動受身文(Activo-passive文)の分布が、東西チュルク諸語グループ間で顕著に異なることを指摘した。第五章では、同じく現地言語調査による詳細なデータをもとにした分析により、東チュルク諸語グループにおいてのみ非空所関係代名詞構造(Gapless Relative)が観察されることを指摘し、多くの新しい言語データを提供した。第六章では、J. Kornfiltの東西チュルク諸語グループに関する統語分布パラミターであるCP/TAMP仮説について検討し、第四章及び第五章で指摘した東西チュルク諸語グループ間の顕著な統語分布の差異が、同パラミターとどのように関わっているかについて詳細に考察した。最終章第七章は本研究の内容を総括するものとなっている。

以上、本論文の内容を概説したが、本研究の最大の特徴は、東西チュルク諸語グループの諸言語が持つさまざまな興味深い言語特徴について、統語論的な観点から独自の分析を試みた点にあるといえる。特に以下に述べる二つの点において本論文内容の評価と貢献が存在すると考える。まず第一番目の本研究の重要な貢献としては、現代トルコ語の関係代名詞構文における-en/-dik連体接辞の分布を、TP指定部の不完全性条件(Defectiveness Condition)と場所格/方向格倒置構文のEPP統語素性分析とを連動させた本研究独自の統語分析法によって正しく予測することを可能にした点が上げられる。また従来主語関係代名詞連体接辞であるとされてきた現代トルコ語の-en連体接辞が、本論文第二章で示した(i)関係代名詞節内の動詞が非対格動詞である場合、(ii)関係代名詞節内の動詞が受動化されている場合、(iii)場所句(Locative句)や方向句(Direction句)が関係代名詞節内の先頭の位置に前置されている場合、(iv)関係代名詞節内の動詞が辞書的に意味が特定化されてい

る一部の連語動詞の場合、の以上四つの場合に限っては非主語要素関係代名詞化接辞として用いられることを明確に指摘したのは本論文の指摘が初めてである。第二番目の本研究の貢献としては、第四章及び第五章で指摘した東西チュルク諸語グループ間の言語特徴の差異に対して、J. Kornfilt の CP/TAMP 統語パラ미터の観点から独自の考察を加え、上記東西チュルク諸語グループ間の統語分布上の差異が、言語計算上の途必要とされる組成照合システム (Feature-checking System) 及び演算子 (Operator) 指定部の条件を援用することにより CP/TAMP 統語パラ미터の当然の帰結として予測可能であることを明示的に論じた点にある。これらの統語論的論考は同時にまた、論文全体に統一的な統語論的視点を与えるものとなっていることは言うまでもない。以上述べてきたように、本研究は従来のチュルク諸語研究に新しい統語論的視点を提供することにより、今後のより豊かな比較チュルク諸語文法の構築に向けての重要な統語論的貢献を目指すものとして位置づけることができるものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文審査は、2月12日午前11時より言語科学演習室において、主査和田道夫、副査栗林裕、同宮崎和人、同片桐真澄、同金子真の計5名により行われた。審査結果は以下に報告する通りである。

本論文は、現代トルコ語 (西グループ) と現代ウイグル語 (東グループ) を中心として東西チュルク諸語グループの諸言語に見られる関係代名詞節構造のさまざまな統語論的特性を観察し、これらの観察から導き出された興味深い統語論的一般性を記述し、さらにこれらの個別の一般性を人間が内在的に有すると生成文法が想定している一組の言語計算システムの帰結として説明しようとする試みである。本論文による上記の意味での当該研究分野への記述的妥当性レベルでの貢献が以下の二点に存することについて、審査員全員の賛同と評価が与えられた。その第一の貢献は、従来主語関係代名詞連体接辞であるとされてきた現代トルコ語の-en 連体接辞が、(i) 関係代名詞節内の動詞が非対格動詞である場合、(ii) 関係代名詞節内の動詞が受動化されている場合、(iii) 場所句や方向句が関係代名詞節内の先頭的位置に前置されている場合、(iv) 関係代名詞節内の動詞が辞書的に意味が特定化されている一部の連語動詞の場合、の以上四つの場合に限っては、非主語要素の関係代名詞化接辞として用いられることを当該研究分野において初めて明確に指摘したことにある。この指摘によって、従来例外的であるとされてきた-en 連体接辞の分布を原則的な分布として捕らえなおすことが可能になったといえる。次に記述的妥当性レベルでの貢献の第二点目として、東西チュルク諸語グループ間に顕著に観察される統語分布上の差異に関する指摘をあげることができる。本研究では、詳細な現地言語調査データの分析と先行研究の検討から、(i) 東西チュルク諸語グループの関係代名詞節内の能動受身文 (Activo-passive 文) の分布が東グループにおいてのみ観察されること、(ii) 非空所関係代名詞節 (Gapless Relative) が東グループにおいてのみ観察可能であることをそれぞれ指摘した。これらの指摘内容は、J. Kornfilt の挙げる東西チュルク諸語グループの統語的差異データとともに今後の比較チュルク諸語文法研究の重要なデータパラダイムを形成するものと言える。

次に本論文の当該研究分野における説明的妥当性レベルでの貢献が以下の二点にあることについても、前記記述的妥当性レベルでの貢献と同様に審査員全員の賛成と高い評価が与えられた。まず第一の貢献として、前記-en 連体接辞の統語分布観察データが、TP 指定部に課された統語的不完全性条件 (Syntactic Defectiveness Condition)、場所格/方向格前置の EPP 統語素性分析、非対格構造の虚字 pro 分析 (Expletive pro 分析)、内在格主語構文分析 (Quirky Subject 構文) などが組織的に連動するシステムを構築することにより、例外的分布としてではなく、言語計算上の原則的な分布として捕らえなおすことができることを詳細に立証した点にある。En-連体接辞の分布に関するこのような組織的な分析は今後の当該分野の学術研究進展に大きく寄与するものとして高く評価できる。次に説明的妥当性レベルでの貢献の第二点目としては、前記記述的妥当性レベルでの貢献の第二点目

として挙げた、東西チュルク諸語グループ間に見られる関係代名詞節内の能動受身文の分布の差異と非空所関係代名詞構造の分布の差異の存在が、それぞれ前者は統語素性照合システムを、後者は演算子指定部条件と Arb-pro 分析を援用することにより、J. Kornfilt の提唱する東西チュルク諸語グループに関する CP/TAMP 統語パラ미터の当然の帰結として導き出せることを明示的に論じた点にある。このことは J. Kornfilt の CP/TAMP 統語パラ미터の有する一般性の高さを支持するとともに、今後の比較チュルク諸語文法研究に占める同統語パラ미터の重要な位置づけと方向性を示唆するものと言える。

本研究の問題点としては、以下の諸点が各審査員によって指摘された。

(i) En-連体接辞の統語分布の説明原理として本論文で提案されている統語的不完全性条件に関して、不完全性 (Defectiveness) の定義が不十分であるとの指摘があった。この点に関しては、本研究では TP 指定部の統語構造上の不完全性を指すものと明確に定義しているものの、移動現象の際の痕跡 (Trace) と虚字 pro が-en 連体接辞の分布に関して、なぜ同じ統語的振る舞いを見せるかについては、なお一層の深い考察が求められるべきであると思われる。特に虚字 pro の研究については、ロマンス諸語における長い先行研究の歴史があり、これらの研究成果をどのようにチュルク諸語の統語解析に利用していくかについては今後のチュルク諸語統語研究の重要な課題と言える。

(ii) 非対格動詞と非能格動詞の区別が、どのような基準に基づいて認定されるのかについて明確な定義に欠けるのではないかと指摘を受けた。非対格動詞と非能格動詞の特性に着目した研究は、Burzio の先駆的な非対格仮説を始めとして生成統語論分野の研究に数多くの興味深い進展をもたらしてきたことは周知の事実であるが、その一方で非対格性の定義に関する明示的な合意がこれまでのところ当該研究分野において形成されてはいない流動的な課題でもある。非対格性は同一言語内の個々の構文間、異言語間の同種構文内においても判断の差が観察される極めて興味深い現象であり、当該研究分野での一層の研究が期待される現象である。その意味では本研究で開発した現代トルコ語の-en 連体接辞分布テストは、イタリア語などのロマンス諸語、ドイツ語などのゲルマン諸語で従来提案されてきた非対格性分布特性パラダイムに、新たにチュルク諸語からの統語的視点を提供することにより今後の一層の非対格性解明の推進に向けて寄与するものであると、積極的に位置づけるべきであると考えられることでもできるだろう。

(iii) 最後に、本研究では十分に取り扱うことのできなかつた問題として、東チュルク諸語グループの関係代名詞節構文に顕著に観察される主格主語関係代名詞構造の存在を挙げることができる。東グループ諸言語が東西チュルク諸語グループに共通する属格主語関係代名詞構造以外に、西グループには存在しない主格主語関係代名詞構造を併せ持つことはよく知られている事実であるが、なぜそのような統語的余剰現象が存在するのかについては、Minimalist 統語論が想定する言語計算システムの経済性の観点からも極めて興味深い問題であり、本研究に課せられた今後の重要な研究課題として一層の調査・分析と深い考察が期待されるものである。

以上本論文審査内容についてその要旨を述べてきたが、審査委員会は、本論文が博士学位論文として十分な水準に達していることについて全会一致で合意した。